

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十八年八月二十日(土曜日) 午後六時三十分開演

演目解説 (石川工業高等専門学校准教授 佐々木 香織)

狂言 膏薬煉(こうやくねり)

鎌倉と上方でそれぞれ大名人を自称する膏薬煉の二人が、互いに相手の噂を聞き、腕比べを思い立って街道で行き会います。名馬生食をつなぎ寄せた鎌倉の馬吸膏薬、八千人引きの大石を持ち上げた上方の石吸膏薬、各々膏薬司を頂戴した先祖の名誉を語り、片や海に生える竹の子、対して空を飛ぶどぶ亀をはじめとする家伝の薬種を明かす、という途方もない自慢の果てに、鼻に膏薬を塗り、吸い寄せて、実際の効き目を試し合います。

能 巴(ともえ)

木曾の山家を出た僧一行(ワキ・ワキツレ)が江州粟津が原の神前で涙を流す女(前シテ)に出会います。女は行教和尚の故事を引きこの場所には木曾義仲を祀ると教えて合掌します。さらに僧に一夜の読経を頼み、入相の鐘の響く頃、亡者を名乗って草陰に消え入ります(中入)。その夜、回向する僧の前に甲冑姿の巴(後シテ)が現れ、義仲の最期に女ゆえに捨てられた恨みを述べます。自らを武士と心得る巴は生きよとの君命が口惜しく、しかし君命には従って去り、死後も君辺に仕えて主君の成仏を願うのでした。最期の別れを思い出して涙にむせぶ巴は群がる敵を長刀で切り払い、形見の小袖と肌の守りをいただいて武器を捨て、女姿に変わって木曾へ落ち行く様を再現した後、その折の後ろめたさが執心となり、浮かばれない我が身をどうぞお弔いくださいと訴えます。義仲の死因を流れ矢(平家物語)から自害に変え、別れ行く女武者の心の葛藤に光を当てた作品です。 (金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附 前シテ(里女) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、増又は小面の面をかける。

後シテ(巴) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、黒垂をつける。